平安・鎌倉時代における「さわぐ」を構成要素とする複合動詞語彙

土居裕美子

目次

はじめに
一　『源氏物語』・延慶本『平家物語』における複合動詞
二　平安・鎌倉時代を通してみた複合動詞
　1　前項・後項の種類と特徴
　2　「もとめさわぐ」「さわぎもとむ」の意味用法
三　後項に「状態」を表す語をとる複合動詞
むすび

はじめに

本稿で取り上げる「さわぐ」を構成要素とする複合動詞語彙について、その複合する動詞の表す意味で大きく分類すると、例えば平安時代和文においては「開け騒ぐ」「争ひ騒ぐ」のような動きの慌ただしさを伴う騒動、「驚き騒ぐ」「怖ぢ騒ぐ」のような感情の動揺、「言ひ騒ぐ」「ののしり騒ぐ」のような音声の大きさによる騒音といったグループに分け

られる。

○左右の戸もみなよろぼひたうれにければ、男ども助けてとかく開けさはぐ。いづれか、このさびしき宿にもかならず分けたる跡あなる三の径、とたどる。（源氏物語　蓬生）

○「……いまはこの世の事を思ひ給へねば、験方のをこなひも捨て忘れて侍るを、いかでかうおはしましつらむ」とおどろきさはぎ、うち笑みつゝ見たてまつる。いとたうとき大徳なりけり。（源氏物語　若紫）

○臥し給ぬるまゝに、いといたく苦しがり給ふ。御ものゝけのたゆめけるにやと人々言ひさはぐ。例の験あるかぎりいとさはがしうのゝしる。（源氏物語　夕霧）

このような複合動詞語彙のあり方は、時代や文章ジャンルの違いによってどのように異なるのか。また、単独動詞「さわぐ」や形容詞「さわがし」等を含めた喧騒を表す語彙の中で、どのような位置にあり、どのような働きをしているのか。本稿はこれらの問題を考える一階梯として、喧騒を表す動詞「さわぐ」を構成要素とする複合動詞について、平安時代和文、院政鎌倉期以降の中世和文、いわゆる和漢混淆文における用法を調査・比較し、その表れ方の諸相を明らかにすることを目的とする。

一　『源氏物語』・延慶本『平家物語』における複合動詞

まず、『源氏物語』と延慶本『平家物語』とに見られる「さわぐ」を構成要素とする複合動詞の前項・後項それぞれについて、動きの慌ただしさを伴う騒動を表すものを「行動・動作」、感情の動揺を表すものを「心情・感情」、音声の大きさによる騒音を表すものを「発話・発声」とし基本的にその三つを基準に分類した。これらは截然と区分されるものではなく「時間」「状態」などの項も新に加えたが、結果を示すと［表一］［表二］のようになる。(1)

［表一］［表二］から以下のことが指摘できる。まず複合する動詞の数に差異がみられることが大きな特徴である。『源

［表一］前項「―さわぐ」

	『源氏物語』	延慶本『平家物語』
行動・動作	あけ(開)　あつかひ(扱)　あらそひ(争)　うけとり(受取)　おき(置)　おこなひ(行)　かしづき(傅)　かぢし(加持)　しつらひ(設)　そそめき　たち(立)　たちそひ(立添)　つつしみ(慎)　はひおり(這降)　まゐり(参)　み(見)　もてかしづき(持傅)　もとめ(求)　ゆきちがひ(行違)	しのび(忍)　たち(立)　はしり(走)
心情・感情	おぢ(怖)　おどろき(驚)　おびえ(怯)　おぼし(思)　おぼほれ(溺)　おもひ(思)　(むね)つぶれ(潰)	あわて(慌)　おどろき(驚)　まどひ(惑)
発話・発声	いひ(言)　きこえ(聞)　ささめき　ずし(誦)　なき(泣)　なり(鳴)	
その他	うち　もて	

［表二］後項「さわぎ―」

	『源氏物語』	延慶本『平家物語』
行動・動作	たつ(立)	そむく(背)
心情・感情	まどふ(惑)	あはつ(慌)おどろく(驚)おぼしめす(思)
発話・発声		ささやく(囁)　ののしる　まうす(申)
時間	そむ(初)	
状態	あふ(合)　みつ(満)	あふ(合)

氏物語』の「さわぐ」を含む複合動詞は、全四十二語中、前項三十七、後項五と、前項の動詞の種類が九割近くを占める。特に前項の種類が多く、それらを意味によって分類すると「行動・動作」を表す動詞と最も多く複合し（三十七語中十九語）、次いで多いのが「心情・感情」を表す動詞である（三十七語中七語）。延慶本『平家物語』は逆に、前項七、後項九と、僅差ながら後項の種類が多くなっている。また『源氏物語』の後項が極めて少ないのに対して延慶本『平家物語』の後項には「心情・感情」「発話・発声」を表す動詞が複数見られる。これに関連して、『源氏物語』では「おどろきさわぐ」「まうしさわぐ」のように前項にのみ見られた語が、延慶本『平家物語』では「さわぎおどろく」「さわぎまうす」のように後項に表れる場合が認められるのである。(2)

二　平安・鎌倉時代を通してみた複合動詞

1　前項・後項の種類と特徴

前節で指摘した『源氏物語』と延慶本『平家物語』との差異は、平安・鎌倉時代を通しての複合動詞の作られ方の特徴の中でどう位置づけられるのか。本節では、平安・鎌倉時代を通してみた前項・後項の特徴について考察する。院政鎌倉時代の王朝物語や女流日記などの中世和文で中古和文からの通時的な流れについて、また説話や軍記物語などのいわゆる和漢混淆文の類で、文体やジャンルによる差異について検討を加える。調査した文献は次に示す通りである。(3)

Ⅰ中古和文

物語：竹取物語　伊勢物語　大和物語　平中物語　多武峯物語　宇津保物語　落窪物語　源氏物語　夜の寝覚　浜松中納言物語　篁物語　狭衣物語　栄花物語　堤中納言物語

歴史物語：大鏡　今鏡

日記・随筆：蜻蛉日記　枕草子　和泉式部日記　紫式部日記　更級日記　讃岐典日記

II中世和文

王朝物語：在明の別　あまのかるも　山路の露　とりかへばや物語　松浦宮物語　あさぢが露　苔の衣　風につれなき物語　木幡の時雨　唐物語　いはでしのぶ　岩清水物語　無名草子　あきぎり　風に紅葉　小夜衣

日記・随筆：うたたね　たまきはる　中務内侍典日記　とはずがたり　竹むきが記　徒然草

III和漢混淆文

説話：三宝絵詞　今昔物語集　法華百座聞書抄　打聞集　宝物集　閑居友　鴨長明発心集　宇治拾遺物語　十訓抄

紀行・随筆：海道記　東関紀行　方丈記

軍記物語：保元物語　平治物語　平家物語（延慶本・覚一本）

歴史物語：水鏡　増鏡

これらの文献から得られた「さわぐ」を含む複合動詞を前項後項に分け、前節と同様の観点で分類して数を示すと［表三］前項「―さわぐ」

	中古和文	中世和文	和漢混淆文
行動・動作	54	9	20
心情・感情	16	10	11
発話・発声	12	2	5
その他	2	2	2
計	84	23	38

［表四］後項「さわぎ―」

	中古和文	中世和文	和漢混淆文
行動・動作	3	7	9
心情・感情	1	2	7
発話・発声	3	2	5
時間	1		
状態	4	3	2
計	12	14	23

三］［表四］のようになる。

中古和文において「さわぐ」を含む複合動詞は、前項八十四、後項十二と、前項の種類が九割近くを占めるのに対し、和漢混淆文全体では前項三十八、後項二十三となり、前項の割合が約六割に減少する。中世和文は文章量の影響もあってか全体に用例数が少ないが、前項と後項との種類の比率は中古和文よりも和漢混淆文に近い（約六割）。また、後項の動詞の種類は中古和文で最も少なく（十二語）、和漢混淆文で最も多い（二十三語）。これらのことから、時代が下るにつれて前項よりも後項に動詞をとる形の複合動詞が増えてくることが窺える。[4] また前項の動詞の意味的な区分では、中古和文の「行動・動作」を表す動詞が最も多い（八十四語中五十四語）。和漢混淆文でも「行動・動作」を表す前項が最も多いが、比率的には「心情・感情」を表す動詞も増えている。この傾向は中世和文でも同様である。これらのことから、中古和文の複合動詞における大きな特徴は、前項に「行動・動作」を表す動詞をとって多くの語を形成しているということであり、その特徴は時代が下るにつれて薄れてくると見ることができよう。

ところで前項後項の数の比較で言えば、和漢混淆文も中古和文と同様、前項の動詞の種類の方が後項よりも多い。しかし前節で述べたように、延慶本『平家物語』は二例の差で後項にくる動詞の種類の方が多かった。同じ平家物語でも覚一本は前項動詞の種類（六語）が後項動詞の種類（二語）よりも多い。[5] 和漢混淆文の中でも文献毎に様々であり、[6] 複合順の傾向が総ての文献に共通していた中古和文と対照的であるといえよう。

2　「もとめさわぐ」「さわぎもとむ」の意味用法

中古和文では前項に「行動・動作」を表す動詞をとる複合動詞が多いことを述べた。例えば人を訪ね探すことを表す「求む」の場合、前項にくる「もとめさわぐ」は中古和文に五例、和漢混淆文に六例あり、複合順が逆の「さわぎもとむ」は中古和文になく、中世和文に一例、和漢混淆文に五例認められる。本節では「もとめさわぐ」と「さわぎもとむ」

とを取り上げ、複合順が逆になることで意味用法にどのような影響を与えているのか、また逆になることの要因は時代差と文章ジャンルの違いとのどちらに求めることができるのかについて検討する。

①この車より「なをこの男たづねて率て来」といひければ、供の人手を分かちてもとめさはぎけり。（大和物語　百四十八段）

②「たゞいまこの子もとめいでずは、わがこにせじ。いかゞしてし」とせめ給。（中略）とねり・ざうしきをばうちしばらせなどしたまふ。御心をまどはしてもとめさはがせ給。（宇津保物語　俊蔭）

③かしこには、人々、おはせぬをもとめさはげどかひなし。物語の姫君の人にぬすまれたらむあしたの様なれば、くはしくも言ひつゞけず。（源氏物語　蜻蛉）

①は再会したかっての夫を、多くの人手を使って探し出す場面である。②以下も同じく、大勢を動員して人を捜索することを表し、その及ぼす範囲の広さや影響の大きさを喧騒と捉えるものである。①「供の人手を分かちて」②「御心をまどはして」などの修飾句によって前項「もとむ」を修飾していること、③のようにヲ格が用いられることから、意味の中心は前項「もとむ」にあると考えられる。これは和漢混淆文でも同様である。

④其ノ時ニ、一家ノ者、喧合テ求メ騒ケレドモ、何シニカハ有ラムズル。跡ヲ暗クシテ失ニケレリ。（ママ）（今昔物語集　巻二十九―三十）

⑤其ノ後、其ノ牛ヲ労リ飼ケル程ニ、何シテ失タリトモ無クテ、其ノ牛失ニケリ。河内禅師、「此ハ何ナル事ゾ」トテ求メ騒ケレドモ、無ケレバ、（今昔物語集　巻二十七―二十六）

＊宇治拾遺物語：「こはいかなる事ぞ」ともとめさわげど、なし。（一一八　巻十―五）

④「喧合テ」、⑤「『此ハ何ナル事ゾ』トテ」は、人を求める求め方を説明していることから、意味の中心は前項にあり、「騒グ」はその求める様子を修飾する働きをしていると考えられる。このように「もとめさわぐ」は捜索が大規模であ

ったり周囲に強い影響を与えたりしてそれ自体が騒動となっていることを表す。

一方中世和文の『とりかへばや物語』には、結合順が逆の「さわぎもとむ」が見える。

⑥かの人は、吉野の宮に訪ねおはして、まづ人をも入れて、「大将殿の御もとより参りたる人なんある」と言はせたれば、よもやまに、失せ給へるよし、さはぎもとめらるゝに、かの人の尋ねおはしたりし後は、いとゞあはれにおぼつかなく思ひ聞え給に（とりかへばや物語　巻三）

これは失踪した女主人公を探しに、男主人公が吉野の宮をたずねる場面である。中古和文の「もとめさわぐ」と意味用法が同じであれば時代を経て複合順が逆になった例と見ることができよう。しかし「よもやまに、失せ給へるよし」とあるのは、次に示す⑦の、女主人公が失踪した当時の喧騒の描写をうけ「失踪のことが世間で騒ぎとなっており、探されている」という状況を指す。つまり前項「さわぐ」と後項「もとむ」とは、並立的な関係にあると考えられる。

⑦内・院などにも、ましていみじかりつる世の光の失せぬる事をおぼしめし嘆き、かつはいかでかさるやうのあらんと、山々寺々、修法読経をはじめ、おほやけわたくし、天の下さわがしきまで、世に変らぬ御さまにてたち帰り給ふべき御いのりを、世にあまるまでのゝしりしるし（とりかへばや物語　巻三）

このように解釈できるとすれば、平安鎌倉時代を通じて、和文では「もとめさわぐ」と「さわぎもとむ」とは異なる用いられ方をしていると考えられる。「もとめさわぐ」は人の捜索が大がかりで騒動となっていることを表す一方で、中古和文では「さわぐ」が前項にくる場合が複合動詞全体において極めて少なかったことを考え合わせると、『とりかへばや物語』の「さわぎもとむ」の前項「さわぐ」と後項「もとむ」との結合度は強いとは言いがたく、この「さわぎもとむ」は「騒ぎ、そして捜索する」ことを表している。(7)

それに対し和漢混淆文の「さわぎもとむ」は、

⑧其ノ人々手ヲ惑シテ、「近ク水ヤ有ル」ト騒ギ求ドモ、水無シ。（今昔物語集　巻十六―二十八）

⑨大ナル河ヲ渡ル間、此ノ生タル皇子ヲ取リハヅシテ、此ノ河ニ落シ入ツ。国王ヨリ始テ騒ギ求ムト云ヘドモ、底ヰモ不知ズ深キ河ナレバ、求メ出スベキ様モ无シ。（今昔物語集　巻第二―二十六）

のように、「騒ぎ、そして捜索する」という結合度の弱い並立的な関係と考えることもできる例もあるが、[8]

⑩然レバ、文君ガ父、文君既ニ失タリトテ、東西南北ヲ騒ギ求ムト云ヘドモ、求メ得ル事無シ。（今昔物語集　巻第十―二十六）

のようにヲ格をとる例が認められる。この「東西南北ヲ」は後項の「求ム」に掛かっているので、意味の中心は後項の「求ム」むにあり、「さわぎもとむ」の語順で強く結合していると考えられる。したがってこの⑩「さわぎもとむ」は、和文での「もとめさわぐ」と同様に、捜索が大がかりで騒動していることを表すと考えられる。

以上、時代や文章ジャンルが異なると複合順が逆になる複合動詞の中で、「もとめさわぐ」「さわぎもとむ」を取り上げ意味用法を考察した。和文では平安鎌倉時代を通じて「さわぐ」が後項にくる「もとめさわぐ」によって捜索の喧騒を表し、和漢混淆文では複合順が逆の「さわぎもとむ」も同様の意味用法を持つ。このことは、複合順が逆になる現象が時代による変化ではなく、文章ジャンルによる違いであることを示すのではないかと考えられる。

三　後項に「状態」を表す語をとる複合動詞

中古和文においては「さわぐ」の後項にくる動詞の種類が少ないことを述べた。その中にあって「状態」を表す語を後項に持つ複合動詞は中古和文にも比較的多く認められる。本節ではこれらの複合動詞の現れ方からその特徴を考察することとする。

後項が「状態」を表す複合動詞には「さわぎあふ」「さわぎまさる」「さわぎみつ」「さわぎゐる」がある。これらは［表五］に示すように平安・鎌倉時代を通じて和文に比較的多く現れるのに対し、和漢混淆文ではそのほとんどが「さわぎ

あふ」のみに偏って認められることが分かる。

［表五］

	中古和文	中世和文	和漢混淆文
—あふ(合)	蜻蛉1＊　源氏1　栄花1＊	小夜衣1＊	今昔8　古本説話1　保元1　平治2　宇治3　平家(延)21　平家(覚)5　増鏡2
—まさる	蜻蛉1　狭衣4	つれなき1　あきぎり1	
—みつ(満)	宇津保3　落窪1　源氏2	山路の露1	増鏡3
—ゐる(居)	宇津保1		

＊さわぎあふ—蜻蛉「おもひさわぎあふ」　栄花「きぼひあらそひさわぎあふ」
小夜衣「うちさわぎあふ」延慶本平家「あきれさわぎあふ」「あわてさわぎあふ」各一例

この中で、「さわぎまさる」は中古和文と中世和文のみに見られる。用例は次の通りである。

〈中古和文〉

①「御いそぎも近くなりぬるを、おぼしいそがせ給はぬこと」など、ものしげに大宮をも聞こえさせ給に、御むねさはぎまさりて、「あないみじや。さばかり恥しげなる人に心置かれ給やうもや」とおぼすに（狭衣物語　巻二）

②思ひがけず、いづれにも音づれ給ふことは、かげろふに劣らぬ折々もあるに、中〳〵、いな淵の瀧もさはぎまさりて、磯の磯ぶりにもなり給めり。（狭衣物語　巻一）

〈中世和文〉

③やがて涙もこぼれぬる心ちして、身にしむばかりおぼえ給。わかみやの御かたにては、すこしまぢかきをり〳〵あ

りけれど、かばかりことつゞけてものゝ給は、まだきかざりつるに、なつかしくあいぎやうづき、をかしき御けはひの心ぐるしげさは、わりなく、むねもさわぎまさるに、人わろく心まどひして、とばかりやすらはれ給ぬ。（風につれなき物語　下）

④「あさゆふけじかき御けいきにつけても、つらさのかずまさりて」といふを、ひめぎみ、つくぐきゝたまふにつけても、いとゞいなぶちのたきはさはぎまさりて、うきありさまを、おもがはりせで、をのづからありとやきかれんと、たゞうき身のためは、見えぬ山ぢのみこそよからめ。（あきぎり　上）

狭衣物語の①「御むねさはぎまさりて」、②「いな淵の瀧もさはぎまさりて」は『風につれなき物語』『あきぎり』の③④に受け継がれており、[9]時代を通じて共通した意味用法を持つ複合動詞であると考えられる。

また、「さわぎみつ」は次のように見える。

〈中古和文〉

①大将の君、常にいと深う思ひ嘆きとぶらひきこえ給ふ。御よろこびにも、まづまうでたまへり。このおはする対のほとり、こなたの御門は、馬、車立ち込み、人さはがしうさはぎみちたり。ことしとなりては、起き上がる事もおさ〳〵し給はねば、をも〳〵しき御さまに（源氏物語　柏木）

②宮はこの暮れつ方よりなやましうし給けるを、その御けしきと見たてまつり知りたる人〳〵さはぎみちて、おとゞにも聞こえたりければ、おどろきて渡り給へり。御心のうちは、あなくちおしや、又思ひまずる方なくて見奉らましかば、めづらしくうれしからまし、とおぼせど、人にはけしき漏らさじとおぼせば、験社など召し、御修法はいつとなく不断にせらるれば、僧どもの中に験あるかぎりみなまいりて、加持まいりさはぐ。（源氏物語　柏木）

〈中世和文〉

③さぶらひ所なりけるをのこどもも、みなをきゐでゝ、「ゆゝし。とくまいり給へる物かな」といふもいとおかしと思

ひけり。このとのちかしときゝつけてまいり給へる人々馬くるまの音しげく、さはぎみちたり。火はことぐしけれど、風の吹きかけて（山路の露）

『源氏物語』の①「馬、車立ち込み」という状況は、『山路の露』の③「馬くるまの音しげく」と同様の状況であり、中古中世を通じて意味用法は同じであると考えられよう。また、和漢混淆文として分類した『増鏡』の④⑤も、大きな出来事が起こり世の中が勤行や行事で騒動していることを表す点で、①～③と同じ意味用法であると考えられる。

④山々寺〻残りなく勤めのゝしる。医師・陰陽師、祭り、祓へと、天の下さわぎみちたり。（増鏡　第三藤衣）

⑤六條殿へ、本院・新院・春宮ひき続きて移らせ給ぬれど、日にそへて、天の下さわぎみち、恐ろしきことのみきこゆれば（増鏡　第十五むら時雨）

このように、「さわぎみつ」は中古中世を通じて意味用法が共通する、和文に特徴的な複合動詞であると考えられるが、この「さわぎみつ」に限らず、後項に「満つ」をとり「～満つ」の形で喧騒をあらわす複合動詞は、［表六］に示すように平安・鎌倉時代を通じて和文の文献に多く見え、和漢混淆文に分類したものの中では『増鏡』に偏っていることが認められる。

和漢混淆文の欄に散見する『増鏡』は『源氏物語』の影響を受けているとされることを考え合わせると、和漢混淆文の他の文献にほとんど認められないことからも、これらは和文に特徴的な複合動詞であると考えられる。すなわち喧騒を表す語彙の中で、その状態や程度が拡大することを表す「～まさる」、ある範囲の中が喧騒でいっぱいになることを表す「～みつ」は和文において特徴的な複合動詞の造語法であったと考えられる。ただしこれらの複合動詞がなぜ和文に特徴的であるかといった要因や、例えば和文での「さわぎまさる」「さわぎみつ」が和漢混淆文ではどのような語彙で表されているかなどについては今後検討しなければならない課題として残っている。

［表六］　喧騒をあらわす「～みつ」型複合動詞

	中古和文	中世和文	和漢混淆文
さわぎ―	宇津保3　落窪1　源氏2	山路の露1	増鏡3
ののしり―	蜻蛉1　源氏1　更級1　栄花1	在明の別れ2　苔の衣2	増鏡1
なき―	蜻蛉2　源氏2		
なり―	源氏1　栄花2		
ひびき―	宇津保1	苔の衣1	
ゆすり―	宇津保3　落窪1　枕1　源氏3　狭衣2　栄花5　堤1	苔の衣1 岩清水物語2	発心集1　増鏡2

むすび

以上、本稿では喧騒を表す動詞「さわぐ」を含む複合動詞語彙について、平安時代和文、院政鎌倉期以降の中世和文、いわゆる和漢混淆文における現れ方の諸相を調査し考察を行った。平安時代和文の複合動詞における特徴は前項に多くの「行動・動作」を表す動詞をとり様々な動作の生み出す喧騒を表現していることであり、その特徴は時代が下るにつれて、特に和漢混淆文において薄れてくる。ただし、和漢混淆文の中でも文献毎に様々であり、前項の種類が多い和文的な現れ方をする文献から、逆に後項に多くの種類をとることの多い文献までいくつかの段階があることを指摘した。その中で「もとむ」と複合する「もとめさわぐ」「さわぎもとむ」を取り上げ、意味用法を考察した。和文では平安鎌倉時代を通じて「さわぐ」が後項にくる「もとめさわぐ」によって捜索の喧騒を表し、和漢混淆文では複合順が逆の「さわぎもとむ」も同様の意味用法を持つ。このことは、複合順が逆になる現象が単に時代による変化を反映しているので

はなく、文章ジャンルによる違いであることを示すのではないかと考えた。

さらに、後項の種類が少ない特徴をもつ和文の複合動詞の中で「さわぎまさる」「さわぎみつ」など後項が喧騒の「状態」を表す複合動詞が和文において特徴的な造語法であったことを述べた。

本稿で得られた結果は大まかに分類した時代やジャンル毎に複合動詞の現れ方の様相を調査し、傾向と見通しを述べたに過ぎない。各用例の意味用法の検討、喧騒を表す語彙の中での複合動詞の位置づけや、造語法の変化・差異の要因を明らかにすることなど検討すべき課題は多く残っており、今後段階を追って考察したいと考えている。

注

(1) 使用テキスト

○『源氏物語』(池田亀鑑編著『源氏物語大成』中央公論社・昭二八～三一)

○延慶本『平家物語』(北原保雄・小川栄一『延慶本平家物語索引篇』勉誠社・平七)

(2) 関一雄氏は、『国語複合動詞の研究』(笠間書院・昭和五十二年二月)において、『源氏物語』の「他動詞―自動詞」の複合では「下位の自動詞の種類がわりと限られていて、その各々が上位の様々な他動詞と比較的自由に結合していることに気づく。すなわちいわゆる補助動詞的、あるいは接尾語的な性格が強いのである。」(第一章　複合動詞全般とその変遷　一一〇頁)とされる。さらにそれらの補助関係を基調とした複合動詞は時代が下がるとともに意味関係を変質させたりして複合動詞から外れたりして減少していくことを述べておられる。

(3) 使用テキスト

○竹取物語(上坂信男『九本対照竹取翁物語語彙索引』笠間書院・昭五五)○伊勢物語(大野晋・辛島稔子『伊勢物語総索引』明治書院・昭四七)○大和物語(塚原鉄雄・曽田文雄編『大和物語語彙索引』笠間書院・昭四五)○平中物語(曽田文雄著『「平中物語」研究と索引』渓水社・昭六〇)○多武峯少将物語(小久保崇明編『多武峯少将物語本文及び総索引』笠間書院・昭四

七）○宇津保物語（室城秀之・西端幸雄・江戸英雄・稲員直子・志甫由紀恵・中村一夫『うつほ物語の総合研究1索引編自立語1・2』勉誠出版・平一一）○落窪物語（松尾聰・江口正弘編『落窪物語総索引』明治書院・昭四二）○夜の寝覚（阪倉篤義・高村元継・清水富夫編『夜の寝覚総索引』明治書院・昭四九）○浜松中納言物語（池田利夫編『浜松中納言物語総索引』武蔵野書院・平元）○篁物語（小久保崇明編『篁物語校本及び総索引』笠間書院・昭四五）○狭衣物語（塚原鉄雄他編『狭衣物語語彙索引』笠間書院・昭五〇）○栄花物語（高知大学人文学部国語史研究会編『栄花物語本文と索引』武蔵野書院・昭六〇）○堤中納言物語（土岐武治『堤中納言物語校本及び総索引』風間書房・昭四五）○土左日記（小久保崇明・山田瑩徹『土左日記本文及び語彙索引』笠間書院・昭五六）○大鏡（秋葉安太郎著『大鏡の研究上巻本文篇』桜楓社・昭三六）○今鏡（榊原邦彦『今鏡本文及び総索引』笠間書院・昭五九）○蜻蛉日記（佐伯梅友・伊牟田経久編『改訂新版かげろふ日記総索引』（風間書房・昭五六）○枕草子（田中重太郎編『校本枕冊子』古典文庫・昭四四年）○紫式部日記（今西祐一郎・上田英代・村上征勝編『紫式部日記語彙用例総索引』勉誠社・平九）○和泉式部日記（東節夫・塚原鉄雄・前田欣吾編『和泉式部日記総索引』武蔵野書院・昭三四）○更級日記（東節夫・塚原鉄雄・前田欣吾編『和泉式部日記総索引』武蔵野書院・昭三一）○讃岐典侍日記（今小路覚瑞・三谷幸子著『校本讃岐典侍日記』初音書房・昭四二）○在明の別れ・あさぢが露・岩清水物語・いはでしのぶ・風につれなき物語・苔の衣・木幡の時雨・あまのかるも・風に紅葉・小夜衣（市古貞次・三角洋一編『鎌倉時代物語集成』第一～三巻）○鈴木弘道編『とりかへばや物語総索引』（笠間書院・昭五二）○松浦宮物語（角川文庫）○山内洋一郎『山路の露本文と総索引』（笠間書院・平八）○次田香澄・酒井憲二『うたゝね本文及び索引』（笠間書院・昭五一）○鈴木一彦・鈴木雅子『たまきはる（健御前の記）総索引』（明治書院・昭五四）○馬淵和夫監修・中央大学国語研究会編『三宝絵自立語索引』（笠間書院・昭六〇）○今昔物語集・宇治拾遺物語・増鏡・保元物語・平治物語・覚一本平家物語（岩波古典文学大系）○中務内侍日記・とはずがたり・竹むきが記・海道記・東関紀行（岩波新古典文学大系）○山内洋一郎『古本説話集総索引』（風間書院・昭四四）○築島裕・小林芳規『中山法華寺本三教指帰注総索引及び研究』（武蔵野書院・昭五五）○小林芳規『法華百座聞書抄』（武蔵野書院・昭五〇）○東辻保和『打聞集の研究と総索引』（清文堂・昭五六）○月本直子・月本雅幸『宮内庁書陵部蔵本宝物集総索引』（汲古書院・平五）○峰岸明・王朝文学研究会『閑居友本文及び総索引』（笠間書院・昭四九）○高尾稔・長嶋正人『発心集本文・自立語索引』（清文堂・昭六〇）○泉基博『十訓抄本文と索引』（笠間書院・昭五七）○榊原

邦彦・藤掛和美・塚原清『今鏡本文及び総索引』（笠間書院・昭五九）○榊原邦彦『水鏡本文及び総索引』（笠間書院・平二）
○青木怜子『広本略本方丈記総索引』（武蔵野書院・昭四〇）

（4）注（3）論考参照

（5）前項：あわて・おそれ・うち・おどろき・ののしり・はしり／後項：あふ・ののしる

（6）調査した文献を前項の種類の多い〈前項型〉、後項の種類の多い〈後項型〉に分けると次のようになる。
前項型：古本説話集・打聞集・発心集・保元物語・平治物語・宇治拾遺物語・十訓抄・覚一本平家物語・水鏡・増鏡
後項型：三宝絵詞・今昔物語集・延慶本平家物語

（7）これに関連して『源氏物語』には「たちさわぎもとむ」という例がある。これは「たちさわぎ―もとむ」という複合であり、この場合も「さわぎ」と「もとむ」との間には意味的な切れ目があると考えられる。
○かしこにはよからぬあやしの物ども、いかにたちさわぎもとめはべらん。（東屋）

（8）用例の同文的説話の当該箇所は次の通りである。「はしりさわぎもとむ」という三語複合であるが、注（7）と同様に「はしりさわぎ―もとむ」のように「さわぎ」と「もとむ」との間には意味的な切れ目があると考えられる。
○「近く水やある」とはしりさはぎもとむれども、水もなし。（古本説話集　五八／宇治拾遺物語　九六）

（9）「いな淵の瀧」は和歌的な表現と考えられる。多く「まさる」を導き出すのに用いられ、この例も同様である。

［付記］本稿は平成十一年度鎌倉時代語研究会夏期研究集会（平成十一年八月十一日、於広島大学）における口頭発表をもとにまとめたものである。席上、またその他の折に、小林芳規先生、東辻保和先生、松本光隆先生、鈴木恵先生に貴重なご意見・ご教示を賜った。ここに記して深く御礼申し上げる。